2015 年度　開発教育指導者研修　実践記録

【実践者】

授業者氏名	竹島 潤（代表）　山本清美 廣畑 浩 阿部友彦 水島有奏	学校名	岡山市立京山中学校
教科・科目	英語・美術・社会・道徳	対象学年（人数）	第１学年８クラス（２９３名）
実践年月日もしくは期間（時数）		平成２７年１１月中旬～１２月中旬（７時間）	

【実施概要】

1. 単元名(活動名)：私たちの生活とアフリカの生活の相違に気づき，そのよさを英語で表現しよう。

2. 教科・領域との関連性：
英語科・社会科（地理）・美術科・道徳における協働プログラム

3. 学習領域

	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B グローバル社会	相互依存	情報化		
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標（評価の観点を意識して設定）：

日ア比較の英文エッセイ作成と発表を通して，相互性，多様性，責任性などの持続可能な社会づくりの要素について気付き，多面的，総合的に考える力やコミュニケーションを行う力，他者と協力する態度，つながりを尊重する態度などを培う。

5. 単元の評価規準例	(ア) 関心・意欲・態度	国際社会における多様性やつながりに気付き，外国語を用いて世界で活躍したいという意欲を高める。
	(イ) 思考・判断・表現	アフリカについて社会科地理的分野で学んだ概要理解と個別の国にフォーカスを当てた理解の比較を行うことができる。日本の私たちとアフリカの彼らの生活について，その相違を見いだすことができる。
	(ウ) 技能	既習の英文法を用いて，パラグラフの構成に留意して，日ア比較の英文を書くことができる。
	(エ) 知識・理解	モザンビークをはじめアフリカ諸国について多面的に理解することができる。

6. 単元設定の理由
（児童／生徒観、教材観、指導観）

本単元は，英語科における既習文法を用いて書く活動，国際理解の学習，美術の鑑賞活動，社会科地理的分野におけるアフリカ州に関する学習を関連付けたものである。英語科においては，家族や友人など身近な人についての表現から外国の人や文化についての表現へ，と対象を広げることができる。また，社会科においてはアフリカ州全体の理解から個別の国についての理解へと，その学習を広げられる。アフリカは日本から遠く，身近に感じる生徒は少ないことが予想されるので，いくつかの国に焦点を当てることは有効と思われる。

ワークショップ“私たちの生活とアフリカのつながり”を活用したり，青年海外協力隊員（モザンビーク）の英文エッセイを読んだり，作品交流したりすることで，アフリカの生活や文化についての理解を深めるとともに，言語や文化に対する関心を高め，これらを尊重する態度を育てることができる。また，青年海外協力隊隊員の活動の様子などを英文や写真で知ることで，広い視野から国際理解を深め，国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに，国際協調の精神を養うことが期待される。

アフリカについての多面的な理解を深めたり，持続可能な社会を作るために必要なことを考えたりするきっかけとなることを期待する。

指導にあたっては各教科の能力・態度はもちろんだが，持続可能な社会でもとめられる，以下の能力・態度を身につけさせたい。

	（１）批判的に考える力 　客観的な情報に基づいてアフリカを捉え，偏見や一面的な見方ではなく，アフリカについてより深く理解しようとすることができる。 （２）多面的，総合的に考える力 　アフリカについて，教科書のみでなく現地の情報などをもとにさまざまな見方から捉えることができる。 （３）コミュニケーションを行う力 　アフリカについて学んだことを適切にまとめ，表現し，それを英語で相手に伝えることができる。 （４）つながりを尊重する態度 　教科のつながりや日本とアフリカとのつながりを知り，さまざまな学びへの意欲や国際協調の精神を養うことができる。

7. 展開計画（全１２時間）

時	ねらい	活動	教材
1 社会 (地理)	アフリカ大陸の概要を理解するにあたり，日本から遠いアフリカとのつながりに気づき，私たちの現在の生活は世界と相互依存関係にあることを知る。	“私たちの生活とアフリカのつながり” （ワークショップ）	国際理解教育実践資料集 （PP.10~12）
2 美術	教師が訪問したモザンビークの文化について，現地で撮影された写真を通して，多面的に考えることができる。	ビジュアルシンキング（対話型鑑賞）により，なるべくたくさんの意見や発想を出させる。正解は伝えない。	・授業者がモザンビークで撮影した写真１枚 ・写真家がナミビアで撮影した写真１枚
3 英語 [本時]	第２時の写真も含めて，フォトランゲージ（英語で）を行い，モザンビークやアフリカの理解を深める。	フォトランゲージ 　第２時の正解を英文で説明しながら，事実を伝える。また，アフリカのポジティブな面を知らせる。	・モザンビークで撮影した写真 ・モザンビークで活動する隊員の英文エッセイ
4 社会 (地理) 3 時間	アフリカの概要を理解し後に，個別の国について少人数テーマ別で調査し，発表活動を通して，アフリカ諸国の多様性に気づく。	ネットと本，資料プリントなどを活用して，調べてまとめさせる。個別の国については，教材や後の交流にかかわる国からできるだけ選択する。	・社会科（地理）資料集 ・図書館の関連書籍など
5 英語 2 時間	日本とアフリカについての相違点や気づいたことをまとめて，英文で書く。	少人数グループでパラグラフに留意しつつ，日本－アフリカ比較の英文エッセイを書く。導入－本体－結論の構成に留意させる。	・社会科（地理）の調査活動レポート ・ブレインストーミング ・下書き，清書のワークシート
6 英語 2 時間	日本－アフリカ比較の英文エッセイを文化紹介の記事をつくる。	暗唱や発表練習を十分にした上で，発表会を行う。 　自他の発表を通して気づいたことをもとに，作品を改善する。	・教材提示装置
7 英語 ※	モザンビークの中等学校と英文エッセイの作品を用いた交流を行う。	最終版の作品を，関係国の隊員に送り，現地の学校の生徒と意見交換する。	・生徒が作成した作品
8 道徳	国際社会で貢献し活動する青年海外協力隊員の生き様をとおして，国際社会の中で生きる日本人としての自覚をもって，行動できる人を目指す。	JICA の活動を知るとともに，現地で活動する隊員の生き様に焦点をあてた道徳自作教材を活用した意見交換を行う。	・モザンビークで活動する隊員の活動やインタビューをもとにした，自作教材 ・JICA 紹介 DVD

8. 本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （10分）	1　あいさつをする。 2　ウォームアップと歌を行う。 3　前時の復習を行う。	1　日にちや天候のことにふれる。 2　トピックトーク（行ってみたい国）および英語の歌を歌い，英語で表現しようという雰囲気をつくる。 3　教科書内容を復習し，現在進行形を用いて，絵や写真の説明を行うやり方を思い出す。	
展開 （30分）	4　本時の目標を理解する。 5　現在進行形を用いたモザンビークを紹介する英文の読解を行う。 6　ペアでモザンビークの写真１枚から読み取れることを書き出す。 （１）例文を提示する。	4　美術で鑑賞した絵とその時の鑑賞文を英文化したものを提示し，異文化フォトランゲージのやり方を確認する。 5　センスグループを意識して，前から意味を取るように助言する。インタラクションをとり，日本との相違や文化的特徴など補足情報を引き出す。 6　視点や気づきを大切にするため，言語は日英とも可とする。 （１）次の条件を提示する。 ・現在進行形（is/am/are＋ing形）を用いての写真説明をする。 ・アフリカ（モザンビーク）のよさやできること，canなどで説明する。 ・既習の表現をしっかり使う。	モザンビーク写真① 青年海外協力隊隊員の英文エッセイ フォトランゲージ モザンビーク写真② 現地で撮影した１９枚（１ペアに１枚）
まとめ （10分）	（２）ペアで考えをだし，できるだけ英語で書く。 7　数ペアが発表する。 8　課題と次時の予告をする。	（２）机間指導し，考えや表現のヒントを出す。 7　参考となりそうな表現やおもしろい気づきを共有する。 8　次時は清書を簡単なプレゼンを行うことを告げる。	ワークシート

9．本時の評価

生徒たちは，美術の授業でさまざまな視点から写真を鑑賞する経験をしていたので，生徒は大変関心をもって，その背景や異文化にかかわる事実を聞いた。また，社会でアフリカの調べ学習をした知識も引き出しながら，生徒はアフリカ（モザンビーク）で活動する青年海外協力隊員のエッセイを類推しながら読むことができていた。こうしたつながりのもとで，授業者が実際に訪問したモザンビーク共和国の写真を用いて，英文での紹介文を書く活動をもってきたことで，ペアでアイディアを出し合いながら，大変楽しんで活動していた。また，現在進行形や助動詞 can，その他の既習表現などを用いながら活動できていた。エッセイの構成を例示したことで，ペアで助け合いながら意欲的に取り組めていた。次時に写真を提示して英語でプレゼンを行うことへの意欲も高まった中で，授業を終えることができたと思う。

【自己評価】

10. 苦労した点	教科間でのつながりを情報交換しながら，生徒の思考に沿った教材の扱いや学習活動の進度となるように調整すること。実施した学習プログラムを体系化することで，より効果的なものにする必要性を感じた。また，当該国や出身国の留学生との交流については，時差や関係機関との調整の都合で，直近には行えなかったが，時間差があっても実施する予定である。
11. 改善点	やはり生身の人間や生きた英語を用いたコミュニケーションが必要だと感じた。プログラムを始める前から，現地または留学生らとの交流時間をしっかりと確保したい。また，今回は英語で長文を書く活動，地理でアフリカの国々について学ぶ学習，美術での写真鑑賞などの内容を関連付けたが，これ以外の教科や学習内容についても，その関連をいかした学習プログラムを実施していきたい。
12. 成果が出た点	プログラム全体のふりかえりアンケートを実施した結果，次のようなことがわかった。まず，生徒の認識として，英語の学習活動，教科間のつながり，日本とアフリカの国々とのつながりなどについて，これまで以上に気づきや深まりがあった。 次に，アフリカをはじめ途上国や海外のイメージをネガティブなものだけでなくとらえ，日本との違いだけでなく共通点にも気づけた。さらに，英語で長文を書くことや国際社会への関心・意欲が高まった。
13. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	以下に，生徒の学習プログラムへのふりかえりでのコメントを一部抜粋する； 【教科のつながり】 ・３教科を通して学習することで、文化などの大切さが凄く分かり、国際交流について関心が深まったので、よい機会になったと思う。 ・社会と英語を通してより深く調べられたのでよかったと思う。またやりたいと思った。 【日本とアフリカ】 ・アフリカのことはそこまで調べたことがなく、「貧しい」「暑い」イメージしかなかったが、英語とか社会とかいろいろな学習の仕方をして，もっと良いところをたくさん知れていろいろと分かった。 ・最初はアフリカについて、まったく知識がなかったけど、授業をしていく中で、アフリカの知らなかった一面を知ることができて、勉強になりました。英文を自分たちで考えていくなかで、もっと英語力を身に付けたいと思いました。 ・自分の思っていたアフリカと、今のアフリカがすごく違っていてびっくりした。 ・今までアフリカを変なところとして見ていたが、この授業のおかげで、アフリカの色々なことが分かり、日本との共通点も多いことが分かった。 【英語の学習活動】 ・ing や can を用いた表現は楽しかった。英文を書くのが楽しかった。 ・英語のスピーチの単語を話したり、辞書で引いてそれを言ったりするのは大変で難しかったが、がんばれてよかったです。 ・英語に訳して説明するのが難しくて，知らない単語を知ることができたし，自分の英文の構成を見直すことができてよかったです。 ・続きの学習をしてみたいと思った。この学習により，アフリカのよさがとてもよくわかった。実際にアフリカに行ってみたい。 ・自分で調べて英語にするのは難しかったけど，やりがいあってとても楽しかった。自主的にもやってみたいと思った。

14. 備考（授業者による自由記述）	（英語科　竹島・山本） ２学期の後半，現在進行形を定着させるというねらいのもと，教科書内容にあった異文化理解とリンクさせていくことに加えて，既習事項を活用できるよう留意した。教科書を飛び出した，生きた教材と具体的な計画のもと，生徒の興味・関心を広げ，将来的にも自分の視野を広く持つ機会になったと思います。授業を通して，英語（言語）は国境や文化を超えた，コミュニケーションの道具なんだという気づきがあったように思います。また，英語が教科の学習をつなぐことを再認識し，とても嬉しくなりました。 （美術科　廣畑） 作品をみて思ったこと，考えたことをしっかり発信させ，写真に写っている状況について深く考えさせるようにした。できれば，それが意味することやそこからどんな印象をうけたかまで深められるよう留意した。美術科における鑑賞をどう次の活動や行為につなげていくか，具体的に学べるプログラムになっていて意義深いと思う。 （社会科　阿部・水島） 調査活動での資料準備に工夫が改善点である。教科横断で行うことで，学びが充実したプログラムになったと思う。また実施してみたいと思う。

参考資料：

・JICA 地球ひろばホームページ http://www.jica.go.jp/hiroba/
・「国際理解教育実践資料集－世界を知ろう！考えよう！」（JICA 地球ひろば　２０１４年）
　ワーク１　私たちの生活とアフリカのつながりを考える
・「学校における持続可能な発展のための 教育（ＥＳＤ）に関する研究[最終報告書]」
（国立教育政策研究所　２０１２年）
・モザンビークにて活動中の舟木隊員のブログ「CANI MAMBO」http://canimambo.blog.fc2.com/
・DVD「もっと知ろう世界のこと～JICA は世界とともに～」（JICA）